

巻 頭 言

岡田温司

みずから「軟体動物」になぞらえ、あくまでもしなやかに「漂流思考」を展開してきた篠原資明さんがこのたび退職されることとなった。本号はこれを記念して編まれたもので、大学院で篠原さんの薫陶を受けた気鋭の研究者たちが著者として名前を連ねている。

各々の論題は、茶道や庭園論、近代日本の美術や文学から、音楽や映画やファッション、西洋の近現代美術、そして現代フランスの美学・哲学思想等にいたるまで、きわめて多岐にわたるもので、それはそのままそっくり、指導教員である篠原さんの関心の広さと懐の深さを反映したものになっている。さらに、創刊号からこれまでのバックナンバーをひもといてご覧になれるなら、いっそうそのことを実感していただけるだろう。

篠原さんはまた、「まぶさび庵」と称する庵を営んでおられる。それは、感性和知性、詩と哲学、思考と創造、美と聖、仕事と遊戯、真面目と洒落気とのあいだの境界線が消滅してしまうような不思議な時空である。学問には色気と遊び心が必要である、これは、篠原さんとわたしの共通の師である新田博衛先生から教わった貴重なモットーだが、篠原さんはまさしくそれを名実ともに実践してこられたのだ（わたしはその足元にも及ばないでいる）。この教訓もまた、多くのお弟子さんたちの心に刻まれてきたにちがいない。

哲学とは概念を創造することである、こちらは篠原さんの長年の研究対象のひとつであるドゥルーズの名高いテーゼ。篠原さんはこの点でも引けを取らない。「まぶさび」、「風雅モダン」、「軟体構築」等の新造語とその理念については、わたしがここで贅言を弄するよりも、ネットから「まぶさび庵」を訪ねていただくに越したことはないだろう。篠原さんのこの独特の身振りは、なかなか余人の追隨を許すものではないが、これもまた、わたしたち後輩に伝えられた篠原さんの学問的遺産にほかならない。